

編 集 後 記

『キリスト教学』第61号を立教大学キリスト教学会の会員、また関係者の皆様のお手元にお届けできたことを心より嬉しく思います。ご存知の通り、本誌は『立教大学神学年報』（1953～1958年）を前身とし、1959年以降、現在の名称として発行されてきました。第1号の巻頭言「改題に際して」という菅円吉氏による文章を読むと、狭義の神学研究ではなく、「ライエン・ドグマティック」（平信徒の教理学）ともいえるキリスト教音楽と芸術を含む、広義の神学研究の場にならんという強い意志が読み取れます。また、神学研究といっても、立教のキリスト教学科は、戦前の神学・哲学・宗教学の諸科が統合して発足した経緯もあり、「教会」に直接仕える、聖職者養成のためではなく、広く公共の益となるために、「キリスト教」という多岐にわたる現象を批判的に検証できる場として意図されているといってもよいでしょう。果たしてこうした高い理想を現在の学会、そして本誌が担っているかは不安が残るところです。しかし、混迷を極める現代社会にあるからこそ、担うべきものであるとも強く確信しております。今年度は本学科・研究科に新しい教員が二人加わりましたので、存在意義を再度確認、また刷新しながら、各地に遣わされた皆様の益になるような紙面を目指してまいります。

さて、本号の構成は、論文3本、書評6本、2018年度博士論文要旨4本、2018年度課題研究報告書要旨3本、2018年度優秀卒業論文要旨1本となっております。論文のなかでも、宇井志緒利氏による「紛争後のカンボジア社会におけるキリスト教」は、2019年度立教大学キリスト教学会大会で行われた主題講演がもとになっています。今年度で退任なさる宇井氏は、2015年4月に本学研究科の特任教授として着任され、5年間にわたってかけがえない貢献をしてくださいました。本論文は、彼女の本学での教育・研究の一部にすぎませんが、このような形で公開できたことは幸甚の至りです。ま

た、2018年度は4人の博士を送り出すことができました。彼らの今後の働きの核となるであろう仕事の一部を垣間見れるのも本誌の醍醐味であります。

最後になりますが、本号の編集作業を中心的に担われた、キリスト教学研究科教育研究コーディネーターの依田郁子氏に、心から感謝の意を表したく存じます。着任一年目であるにも関わらず、氏は編集作業を迅速に、かつ精力的にこなしてくださいました。かくいう編集責任者も着任一年目でありまして、様々ご迷惑を多方面におかけしたことをお詫び申し上げます。今後は上述の理想に近づけるよう精一杯努めてまいりますので、皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2019年12月

編集責任者 加藤 喜之